

【寄稿】 奥田日記翻刻雑感

花田, 龍志

<https://doi.org/10.15017/2344795>

出版情報：奥田八二日記研究会会報. 3, pp.326-326, 2019-09-30. 奥田八二日記研究会(九州大学大学文
書館内)

バージョン：

権利関係：

【寄稿】

奥田日記翻刻雑感

花田龍志

2017年の秋頃だったか、友人である元高教組書記長の今橋さんから、奥田日記の翻刻を頼まれたが、時間のゆとりもあり、何より奥田知事の日常を垣間見ることができると、期待感をもって二つ返事で引き受けた。依頼されたのは、1991（平成3）年の1年間。この時期は、国際的には冷戦構造の解消後、政治的混乱を收拾できずソ連が解体し、やがてEUの発足を控えるという歴史の転換期であった。

1991年は奥田三選の年であった。知事は体力の衰えや体調不安を自覚しながら、周囲の声に支えられ選挙戦に臨もうとするが、連合福岡の動きは鈍く、支援組織の21県民の会が立ち上げられのが、年明けという有様であった。知事はときには愚痴や弱音を吐露しながらも使命感は旺盛で、現職2期の実績と「クリーン奥田」を訴え、保守分裂の間隙を突いて勝ち切った。

この年は、雲仙普賢岳噴火や大型台風など自然災害が多発し、県内でも筑後地区を中心に大きな被害が出た。県議会では、台風17・19号の対応にあたって、自民党の執拗で的外れな「奥田攻撃」が繰り返され、またこれに同調する一部マスコミも攻撃的な追及を続けた。三選してもなおである。しかし持ち前の粘り腰で県議会を乗り切る奥田知事のしたたかさには感服させられる。

日記は、毎日タイトルがつけられ、1日が1頁に几帳面にまとめられている。アメリカ軍の新たな世界展開に批判的に言及するなど、政治家の目を通した社会批評が数多く記されているが、自らの高齢や健康、趣味の事柄にふれている何気ない日の記録が、むしろ、私には印象深かった。書家でもある知事は淡麗な書体で、丁寧に毎日を綴っているが、ときに文字の乱れた頁が散見された。体調のすぐれない日も多かったのではとってしまう。それでも、俳句の本を読み、書に親しむ時間をもつことができたゆとりの一日は、知事の嬉々とした姿が伝わってくる。

ワープロは暇にまかせて1日で1週間ほどを打ったが、旧字や独特な送りがなの使い方がされていて、転換にいささか苦勞もあった。1年分となると、結構な分量になったが、年末所感を打ち終えるとさすがに安堵すると同時に貴重な体験をさせて頂いたことに改めて感謝を覚えた。

私の部屋の書棚の中に一枚の色紙がある。奥田知事の揮毫である。平成八年春とあるので、知事職を辞した翌年の正月ころの作であろう。「共に惜しまん 寸陰の移ろうを」の句は、知事の実感だろうか。しみじみと心に迫ってくる。